

あたらしくあゆもう

牧師 山本 護

「きりすと／われにありとおもうはやすいが／われみずから／きりすとにありと／ほのかにてもかんずるまでのとおかりしみちよ／きりすとが わたしをだいてくれる」。

これは八木重吉(1898~1927)、大正13年(1924)頃の詩「貧しきものの歌」の第三連。むすびの第五連はこう記されています。

「あたらしくあゆもう／きのうのうたはわすれよう／しかしながら／きのうのうたとおなじように／きょうもうたうことをおそれはすまい」。

信仰の詩人として広く知られている八木重吉。ただ、キリスト教界での護教的な取り上げ方はどうも、つるりトコロテンのようでつまらんなあ。重吉の詩、噛んでいると口の中に何かが残るのですが、この雑味をさすがに江藤淳はうまく語っています。

「彼がキリストの中に何を見たかは、宗教的な体験に属している。～文学的にいえば、それらはむしろ実存的体験の所産であり～それは『貧しき信徒(死後発刊された代表的な詩集)』た



ちのみならず、貧しき不信の徒たちにもひらかれている。八木の詩はキリストを指しているかも知れない。しかしそれはキリスト「のみ」を見ようとする人々に見えないものをも示している(江藤)。

新しい年を迎え、「あたらしくあゆもう／きのうのうたはわすれよう」とはいえ、それが習いになり、江藤が言うように「キリスト「のみ」を見よう」と凝り固まったら神の創造の多様さを見逃してしまうでしょう。「きのうのうたとおなじように／きょうもうたうことをおそれはすまい」。私たちは昨日の歌をうたうのではありません。今日は、今日の恵みと悔い改めを讃美し、その歌の新鮮なうたい方が明くる日に引き継がれるのです。

今年「貧しき信徒」として御言葉を受け取りつつ、これまで見落とされがちだった「貧しき不信の徒」への御言葉をも受け取って、「われみずから／きりすとにありと／ほのかにてもかんずるまでのとおかりしみち」を進んでみたい。

降誕祭の燭火礼拝が終わると、窓の外の十字架のむこう、まんどり山の上に月が昇りました。まんまるの月が、静かに、ぽつぽつ昇っていきました。「ほのかにてもかんずるまでのとおかりしみち」であっても、日々、一歩ずつなら、それなりに歩めそうです。Ω